VANHALEN BALANCE



BANDSCORE

VANEHALEN BALANCE

ヴァン・ヘイレンバランス

NICHION, INC. SHINKE MUSIC PUB.CO.,LTD.

CONTENTS

THE SEVENTH SEAL セヴンス・シール 4
CAN'T STOP LOVIN' YOU キャント・ストップ・ラヴィン・ユー 19
DON'T TELL ME (WHAT LOVE CAN DO) ドント・テル・ミー 33
AMSTERDAM アムステルダム 50
BIG FAT MONEY ビッグ・ファット・マネー 62
STRUNG OUT ストラング・アウト 85
NOT ENOUGH ノット・イナフ 88
AFTERSHOCK アフターショック 100
DOIN' TIME ドゥーイン・タイム 123
BALUCHITHERIUM バルチテリウム 127
TAKE ME BACK (DEJA VU) テイク・ミー・バック(DEJA:VU) 137
FEELIN' フィーリン 147

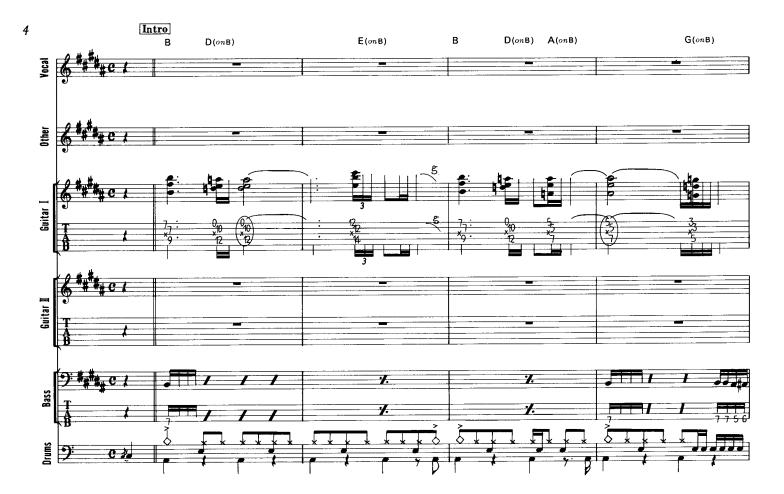
THE SEVENTH SEAL

セヴンス・シール

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

3度の音を省いたコード・スタイルで曲を作っていくのが、ヴァン・ヘイレンの大きな特徴の一つという事が言えるが、この曲も例外ではない。 Keyについては、ブルー・ノートを多用した限りなくマイナーに近いメジャー・キーという解釈が最適と思う。 ギターはイントロからのバッキングは、1度5度コードを基本型としているが、1弦開放が時々聴こえる事から、譜面で示してあるようなスタイルで、4弦薬指、薬指第一関節の腹で3弦をミュート、1、2弦又は2弦のみを人差指で押さえるというフォーム以外は考えにくい。1弦開放音は、おそらく気分次第で出したり出さなかったりしているようだ。採譜の性質上、1音1音を忠実に記譜してあるが、出来れば上述の「気分次第」ということを念頭に置きながらプレイすることをお薦めする。 例からのバッキングは(定位感、エフェクト処理などの細かい設定をするためと思われるが)

2本のギターで分けてレコーディングされている模様。Esus4からDコードにかけての部分がオーバー・ダビングされているが、ライヴなどではこれを1本のギターでプレイすると判断し、譜面にまとめたのである。1度5度では歯切れよく力強いピッキングで音を前に出し、5弦を単音で弾く部分はしっかりとミュートをし、音を奥に引っ込める。極端と思われるくらいの落差を付けると、ちょうど良いバランスになるはず。⑤7小節目からのキメの部分は、ルートの6弦を親指で押さえてプレイしていると思われる。上に乗っているコードは、例の1度5度フォームなので、親指は楽に押さえられるだろう。ベースはイントロからの16分による刻みがメインのプレイだ。オルタネイト・ピッキングで音ムラが出来ないように。ドラムはハットのオープンの度合いの把握が、原曲の雰囲気を出す鍵になっている。













































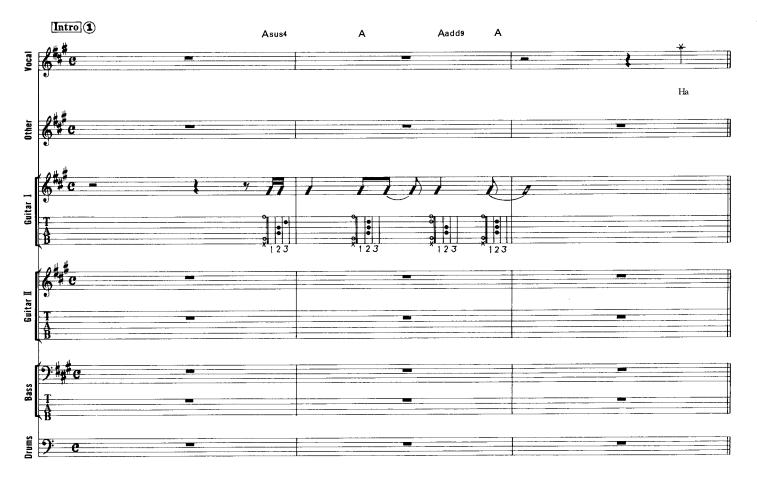
CAN'T STOP LOVIN' YOU

キャント・ストップ・ラヴィン・ユー

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

覚えやすいサビのメロディと、流れるようなスムースな展開はサミー・ヘイガーの要素が色濃く出ているが、リフのアイデア、サウンド・メイキング、ソロで転調させ雰囲気をガラッと変える所などは、エディ健在と言えるだろう。ギター、イントロのリフの指使いから解説していこう。4弦2fを人差指、3弦2fを中指、2弦3fを小指で押さえ、2弦2fに移ったときに薬指に変えるというパターンがベストだろう。薬指、小指は指板に対してなるべく直角になるように押さえ、1弦がミュートされないよう注意しよう。イントロ2からのFm7コードでは、ルートの6弦を親指で押さえているようだ。それと同時に5弦に軽く被さるようにし、ミュートをしている事も付け加えておく。イントロ2からのG2は、タッビング・ハーモニクスだ。ポジション的には、きれいな音が出しづらい位

置のタッピング・ハーモニクスであるため、どうしてもできない諸君は、ピッキング・ハーモニクスなどを代用してもかまわない。ちなみに、細かいポジショニングなどは、プロモーション・ビデオなどを参照してください。 ②8小節目のフレーズは、フィンガー・ピッキングによるもの。単音部は中指で上に引っ張るようにし、コード部は1、2弦は中指、薬指、3弦はピックで同じようにピッキングする方法がベストだ。 ②3小節目後半からのプレイは、タッピング・ハーモニクスで、() 内のフレットを右手でタッピングし、() 外は左手で押さえておくフレットという意味。 ⑤5小節目のテクニックは、ギターのボリュームを0にした状態でピッキングし、素早くボリュームを上げていくというボリューム奏法といわれるもの。小指でボリュームつまみを操作するように。









































DON'T TELL ME(WHAT LOVE CAN DO)

ベント・テル・ミー

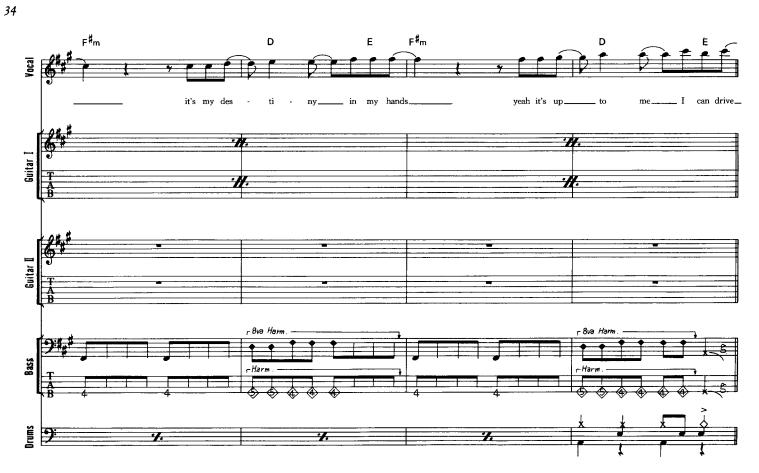
Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

このアルバムでは6弦を1音下げたチューニングでのプレイが目立つが、その内の1つがこの曲。G1、G2共にこのセッティングにしておこう。なおベースも4弦1音下げだ。最初のギター・リフは、右手小指でミュートしてピックの横側で擦るようにピッキングすると、CDと同じサウンドになる。国1小節目のコード・スタイルは、3度の音である3弦をミュートし、親指で6弦をミュートするという形を取る。こうするとストレートなマイナー感が減りマイルドになる。細かい部分ではあるが、ヴァン・ヘイレンのこだわりみたいなものが伝わってくる。国2小節目のハーモニクスは、ブラッシングをするために小指を4行辺りの高音弦に軽く被う形を取り、この状態でカッティングした際に自然に出たものだ。実際には1~3弦のブラッシング音も同時に含まれている事を認識しておこう。回からのG2は2コーラス目から入るが、ここでの

オクターヴ奏法のフォームは5弦薬指、薬指第一関節の腹で4弦をミュート、2弦人差指、人差指の先で3弦をミュートといった形をとっている。通常のオクターヴ奏法のフォームと違い、ここでのフォームだと親指でネックを握るスタイルのままプレイできるという利点がある。 [5 小節目のプレイは、右手の指で3弦9fをタッピングレチョーク・ダウンした後素早く3弦4fを押さえている薬指を7fへ移動させ、そこでチョーキングするといった複合技。 [5 小節目からはダブル・チョーキングをしてのトレモロ・ピッキングだ。チョーキングをするので2本の弦の幅が広がるので、エディ特有の、ハミングバード・ピッキングでやるとやり易くなる。 [4 小節目のハーフ・ミュートは、左手人差指をナットから1cmくらいボディよりの部分の弦上に、軽く被った状態でカッティングしたもの。























C[#]add9

































AMSTERDAM

アムステルダム

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

ギターは、6 弦をDチューニングにし、それを生かしたリフ作りが見て取れる。イントロからのリフでは6弦2fを人差指で押さえた後、4、5、6fを中指、薬指、小指という順に押さえていく。6 弦がノーマル・チューニングと比べたるんでいる為、ピックを押しつけ過ぎると音程がシャープ気味になってしまうので注意しよう。2 小節 4 拍目のX印は、弦を擦ったようなノイズ音。低音弦を、ピックと共に右手の腹をこすりつけていると思われる。十分なディストーション・サウンドじゃないとあの音は出ないので、注意しよう。 国からのリフでは、全てをダウン・ピッキングにし、6 弦の単音部は、右手の腹をブリッジに乗せたミュートを行う方法がベスト。ピッキングが忙しくなるが、中途半端にアップ・ピッキングを入れると音量差が出来たり、アタックのニュアンスが変わってし

まうので。国からのタッピング・プレイは、2弦2fをチョーキングした状態でタッピング&プリング・オフをする。3拍目だけはチョーキングした状態ではないので間違えないように。2小節目は、タッピングと同時に左手のポジションも上昇させていくというパターンだ。フレットを移動した直後の右手と左手のタイミングが難しいので、まずはスロー・テンポで把握しておこう。3、4小節目のフレーズは、クロマチックでトリッキーな効果を狙った物だと思われるが、1弦1fを人差指、2弦5fを小指というストレッチを、しっかりキープした形で動かしていくという感覚でプレイすれば、譜面の細かいフレット表示までは無視しても構わない。7小節目のフレーズは1弦小指、2弦薬指で2本の弦をチョーキングさせるが、2拍目だけは2弦のみのチョーキングになっている。





































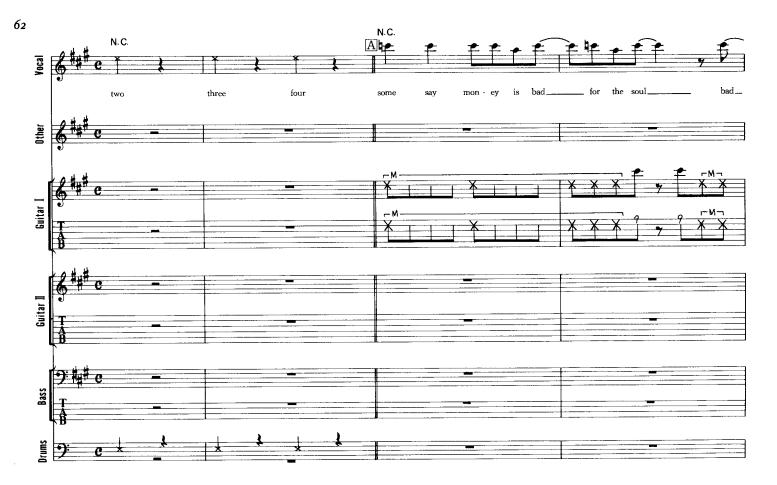
BIG FAT MONEY

ビッグ・ファット・マネー

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

ギターは国からは、軽く高音弦をブラッシングした後、1~3弦を使った7thコードに移る。このコードは1弦9fを小指、2弦8fを中指、3弦9fを薬指で押さえるパターンがスタンダードだ。通常はこれに4弦7fを人差指で押さえる形になる。国2小節目G2のクォーター・チョーキングは、1弦8fを小指、2弦7fを薬指で押さえ、2本の弦共に半音近くまでチョーキングさせるという方法。タイミングはポルタメントで。回からのG2はドライヴ感を出すため低音弦の刻みがオーバーダビングされているが、ライヴではG1をプレイするはずだ。そのG1の2小節4拍目は、Aコードの1度5度の変形。指を開いて1、2弦を小指を寝かせて押さえること。回からのリードは、ジャズ的なアプローチ(理論やスケールに頼った物ではなく、もちろんエディの感覚による)を生かした遊び心あふれるアドリヴ演奏。ジャズっぽく聴こえるのは、もちろんス

ケール外の音を使っているという事もあるが、クリーンで枯れた ギターのトーンによるものが大きいだろう。使用ギターはギブソンES-335。G1のパッキングは、オーソドックスな9thコードだが、 親指を握りしめ 6 弦をミュートする形が出来ていない人が結構いるので、基本的な知識として留めておこう。 15 小節目からは、右手の人差指と中指を同時にタッピングするフレーズ。ここでは タッピング後にプリング・オフを行わないので、左手もタッピングするという事になる。右手と左手の交互のタイミングが非常に 難しいので、スロー・テンポで完全に把握しておく必要がある。 M11小節目からのライト・ハンド・ハーモニクスというのは、右手の人差し指を伸ばし、低音弦中心に軽く乗せた状態で右手はプリングを繰り返す。ここでは、ピッキングは1回も入らないことになる。



































































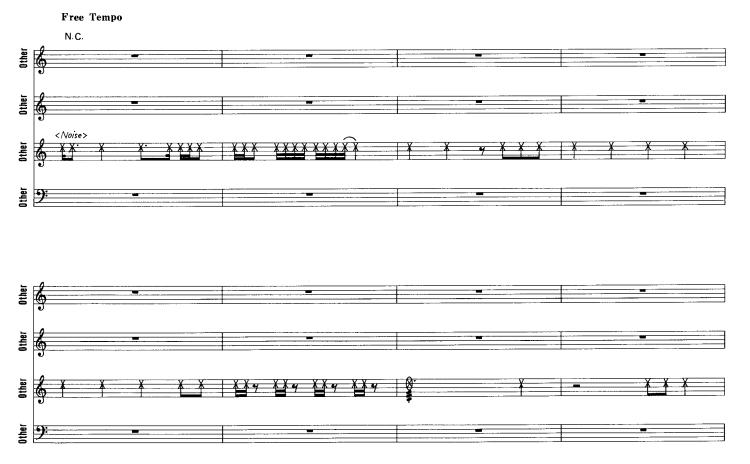


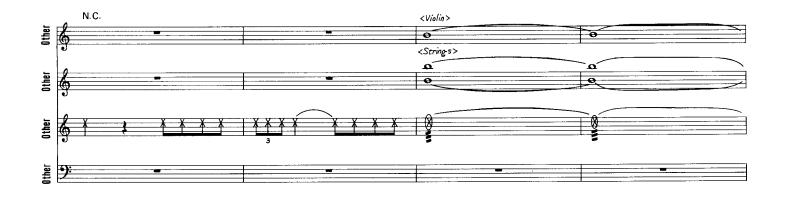
STRUNG OUT

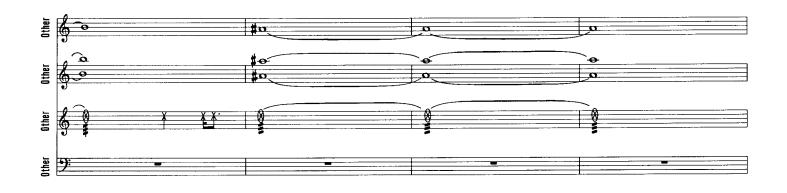
ストラング・アウト

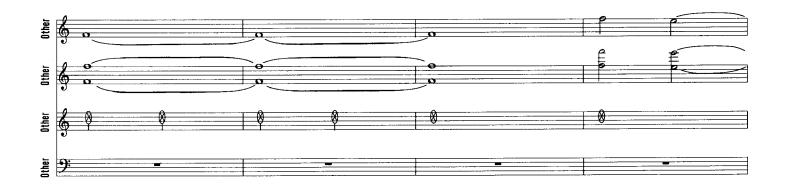
Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

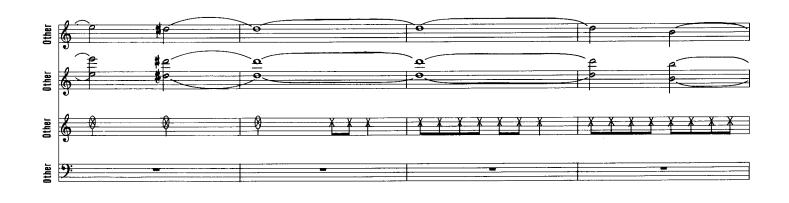
曲というよりも、次の曲を盛り上げるための効果音という方が 適切だろう。全てフリー・テンポとして記譜してあり、リズムの 概念はほとんどないようなものだ。ノイズとして記されているの は、ピアノのストリング部分に、ナイフやフォーク、果てはパッテ リーを転がして作ったノイズらしい。サンプリングして再現して みるのも面白いかも。この曲の譜面は、他の音源は何であるか、と いったことがわかる程度のものとして考えてもらいたい。



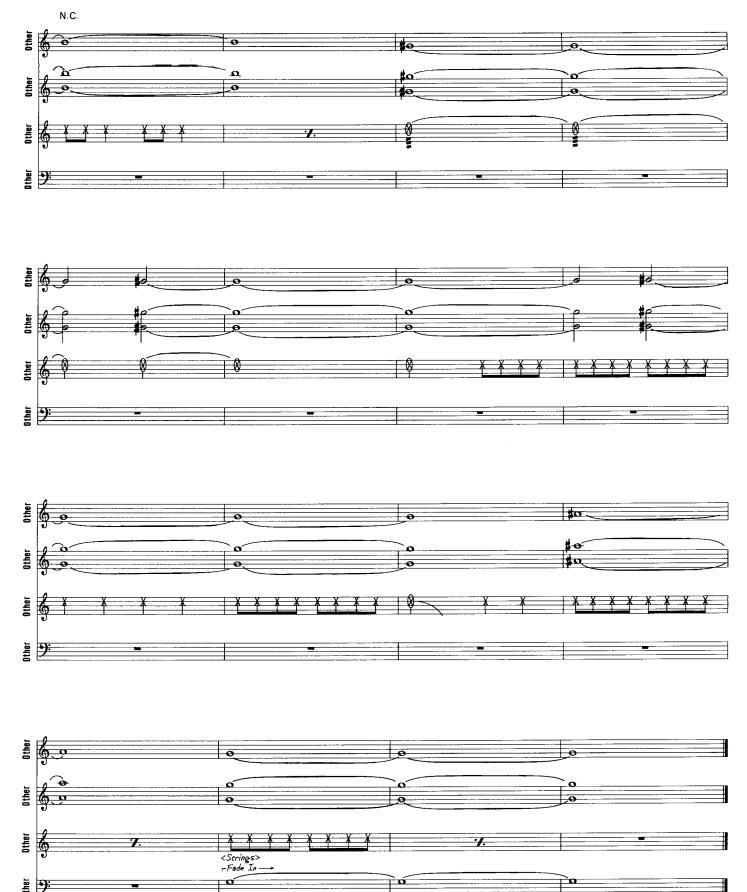












NOT ENOUGH

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

アルバム中唯一ピアノをメインにした曲だ。サミー・ヘイガー の力強いヴォーカルもさることながら、ポップな曲でのエディの バッキングのアイデアで独特な響きを持った個性的な曲に仕上げ られている。ピアノは、強弱を付けた演奏になっている。原曲を 良く聴き、そのニュアンスさえつかめれば、テクニック的には何 ら問題はないだろう。国からのギターのリフで注目するところは、 全てがadd9thコードによって作られているところだろう。このコ ードは、エディが最もよく使うコードで、他の曲でも至る所で頻 繁に使われている。このコードは1度5度コードに9th音を加える という形で構成されているが、その大きな特徴は3度を省いてい る点にあると言えるだろう。これにより、マイナーともメジャーと も言い切れない緊張感が生まれる。コード・フォームは、人差し指

を根本からのばすようにする事。 🖸 9 小節目からは、下段が1度 5度による刻み、上段がコードをレガートにピッキングさせると いう、2本のギターによる演奏になる。多少譜面が見づらいかも しれないが、回回2小節目までこのパターンになっているので、 どちらを演奏するかは本人の自由でいい。国10小節目の32分音符 のフレーズについて解説しておこう。まず、薬指で押さえた5弦 3fを5fへスライドし、そのまま開放弦へプリング・オフ。後はハ ンマリング&プリングを、ノー・ピッキングで連続させるといっ たものだ。やり方さえ把握してしまえば、案外楽に弾けるだろう。 ベースはAlから記譜してあるが、1x tacet (1回休み) になってい る事に注意。後はスロー・テンポでのフレーズ中心になっている ため、待ちきれずに走ってしまうといったことがないように。







































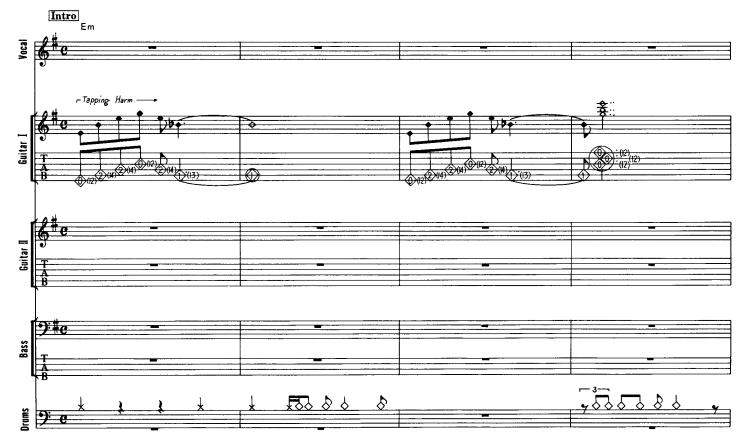
アフターショック

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

このアルバムで多用している、タッピング・ハーモニクスによるフレーズでスタートしている。4小節目は右手人差指の第一関節側面の腹で1~3弦を同時タッピング。タッピングはフレット・バーの真上を叩く事。国からのイントロでは、フランジャーをかけ音をうねらせている所が特徴的だ。このくらいのテンポでの8分音符は音の粒を揃えるため、全てダウン・ピッキングで安定感を出す事がポイント。後はミュートで音を引っ込めた部分から、ミュートを解き音を前面に出していく感じを、上手く表現するように。国からのリフがメイン・リフ。ポイントはEmでのピッキングで、6~1弦にかけタララッとずらしてルーズな雰囲気を出すように。その後のGのフォームは6弦3fを薬指で押さえると同時にその第一関節の腹で5弦をミュート、人差指の付け根で1弦をミュートし、この状態で全弦を歯切れ良くカッティングさせる。[C]

からは、白玉でコードをのばしている間に、ギターのボリュームを $4\sim6$ に落とし、歪みを軽減しているようだ。回に入る 1 小節前のGから、フル・ボリュームにさせている。 \mathbb{K} からのリフ 2 小節目のスライドの説明をしておこう。2、3 弦5fに人差指を寝かせて押さえ、7fへスライドさせる時に、薬指を素早く 2 弦にハンマリングし、2、3 弦8、7fの形を、スライドの途中で作ってしまっているというもの。 3 小節目のスライドも同様。 \mathbb{M} 5 小節目からのアームを絡めたフレーズは、2 弦 15fのチョーキングまでをノー・ピッキングでいっているようだ。つまり 2 回づつのブリングをする前の音は、右手の薬指でタッピングしているという事だ。その際には、アームを 1 回軽く押し込み、すぐに戻すという作業も行うこと。

100





A Em









Aadd9



Aadd9









Aadd9





















 $\mathsf{B}(\mathit{on}\,\mathsf{D}\sharp)$



Cmaj7

A(onC#)





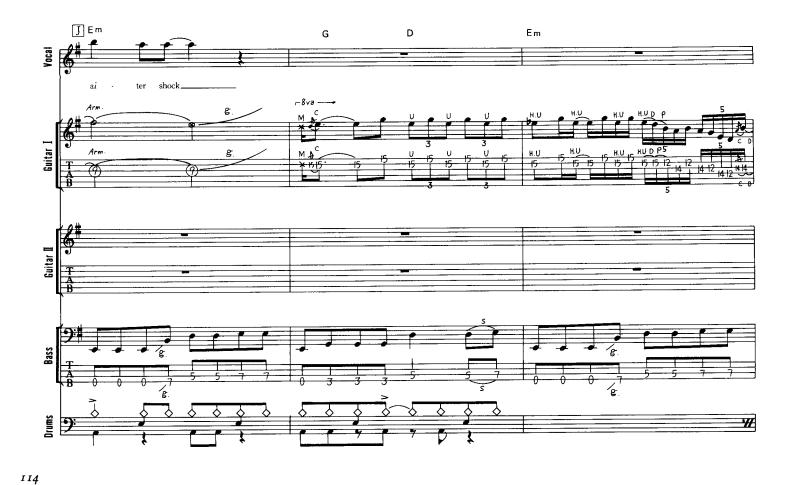




Em7

G

D(onF#)



Em G D G Em G D

THE COLUMN THE C







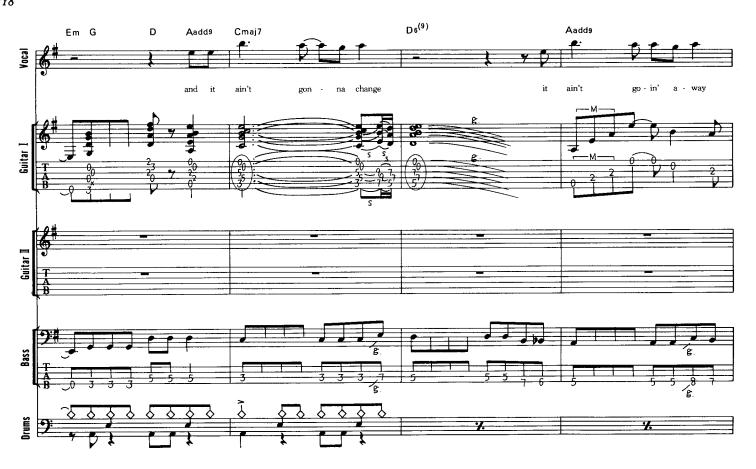
A D C Em G A C D Em G A

Lating









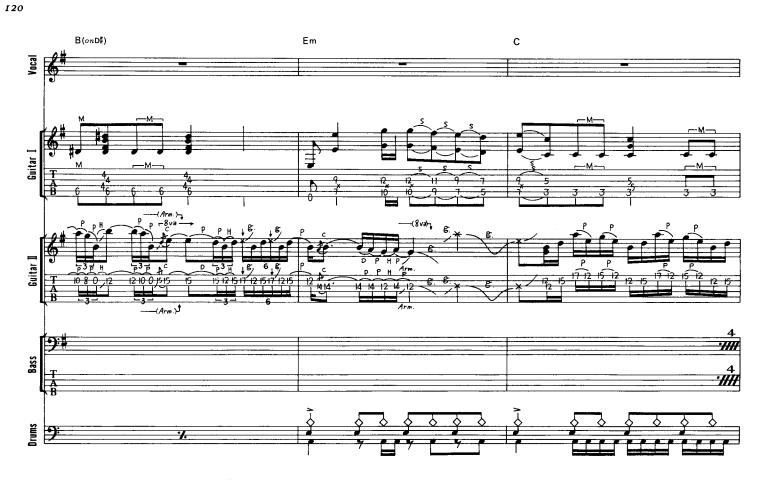




D6⁽⁹⁾

B(on D#)

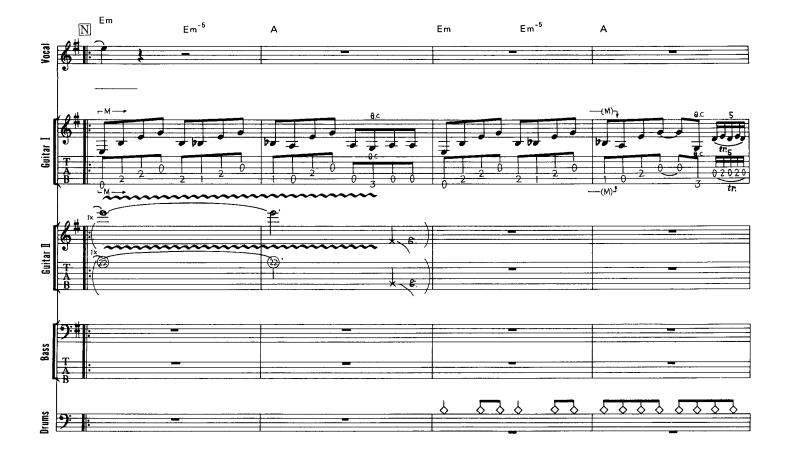








B(onD#)



Tring Tring Stra

Repeat&F.O.

122



ドゥーイン・タイム

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

ゆっくりとしたテンポで、リズミカルな前半のドラム・プレイと、民族音楽の雰囲気の中で、激しく繰り広げられる後半のドラミングという2部構成になっている。マリンバと記してあるものについて一言いっておくと、音色はマリンバであるが、シンセかそれに類するものの打ち込みによるものと思われる。⑥からは、5/4

拍子になるが、良く聴くとカウベルが4分のカウントで入っている。それを見失うと、小節感が全くつかめなくなってしまうだろう。ドラムの表記については、あくまでも譜面は一つの目安としてとらえた方がいい。まあ、この曲を完全コピーしようという人は少ないと思うけどね。











BALUCHITHERIUM

バルチテリウム

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

この曲も6弦を1音下げたチューニングで、1拍分遅らせるロング・ディレイがかけられている。読譜にあたっては、ハンマリングやプリング、スライドなどの記号が多く解りづらいかもしれないが、エディの最近の傾向として特に感じる事で、ピッキングせずに左手でレガートに音をつなげていくといったプレイが多いようだ。時間をかけて一つ一つ吸収しよう。 「A3小節目のプレイはおそらくタッピングによるフレーズだと思われる。3弦7fをピッキングした後、9fへタッピングするのと同時に4fへ薬指を持っていきチョーキングをする。4fへ持っていくのが遅れないようにする事が最大のポイント。こからのG1は、オクターヴ奏法によるプレイ。ここでは一般的なオーソドックス・スタイルの形であろう。どうやらカッティング系のフレーズと、そうでないのと2つの形

を使い分けているようだ。オーソドックス・スタイルでの注意点は、人差指と小指でフォームを作った際に、中指で他弦をミュートし、余分なノイズが出ないようにする事。ここまで徹底的にノイズ対策をしておけば、右手のストロークも思い切って歯切れよくできるというものだ。⑤からのG1は、譜面で記されているものと、これより1オクターヴ高いものとのユニゾンになっている。高い方をプレイしたい場合、12f分上にポジションをずらせばよい。ただし、24fあるギターでないと不可能。 田1小節前からのG2は、6弦のみをAに落とすチューニングになっている。3音半落とすわけだが、ベロベロになるためちょっとでもピッキングに力が入ると音がシャープしてしまうので注意しよう。





























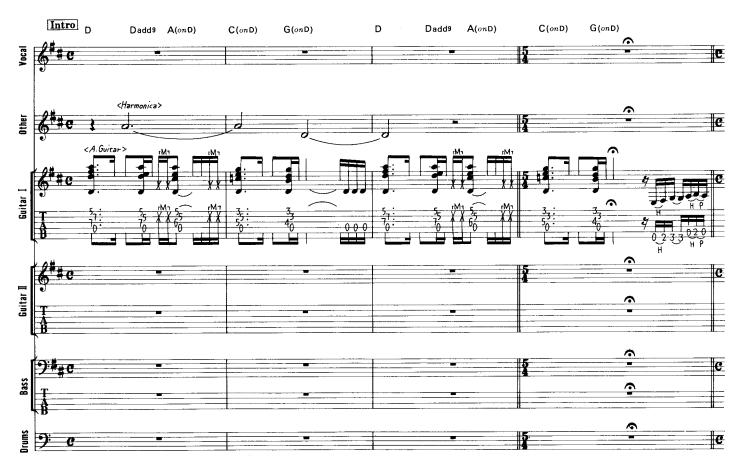
TAKE ME BACK (DEJA VU)

テイク・ミー・バック(DEJA:VU)

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

ギター、イントロは4弦開放をペダル・トーン的に使い、上に乗るコードを変化させていくといった代物。3弦牙を薬指、2弦牙を小指、人差指は1、2弦5fを寝かせて押さえておく。この状態からDadd9thコードの時に小指を離し、A(onD)コードの時に薬指で押さえている3弦牙を中指で6fへ押さえ変える。押さえる指を間違えると、難解になってしまうのでチェックしておこう。©からはアコギとエレキによるユニゾン・プレイ。ライヴで演奏する場合、前半クリーン・トーンのエレキで、©からディストーションをかけるか、本格的にやりたければ、前半アコギにし、©手前のコード部をフェルマータさせ、ギター台を使い素早くエレキに持ちかえるといったプロ技もある。 回からのリフのアタマのGコードは、「Aftershock」で解説したミュート方法で。 ②小節目のG2は、あらかじめBadd9thコード(「Not Enough」参照)を作って

おき、ピッキングを低音弦から高音弦にラフに弾き分けるといったニュアンスのもの。ちなみにG1のE1小節目のコードで、Fの長3度である3弦3fの音が聴こえる。これは、その後の展開や流れなどから見ても、ミス・トーンである。が、本来あるべき姿なので記譜しておいた。正からは、スライド・バーを用いたリード演奏だ。特にチューニングを変えなくても、問題なくプレイできるので、レギュラー・チューニングで記してある。ヴィブラートをかけるときなどでノイズが出ないよう、右手の腹などで低音弦をミュートしておこう。回5小節目のG2は、人差指を寝かせ、2、3弦3fを押さえておき、薬指で2弦を引き下げチョーキングさせるといった技だ。その後はチョーク・ダウン、プリングといった連続になるが、3弦3fの音は、ずっと伸びているように。

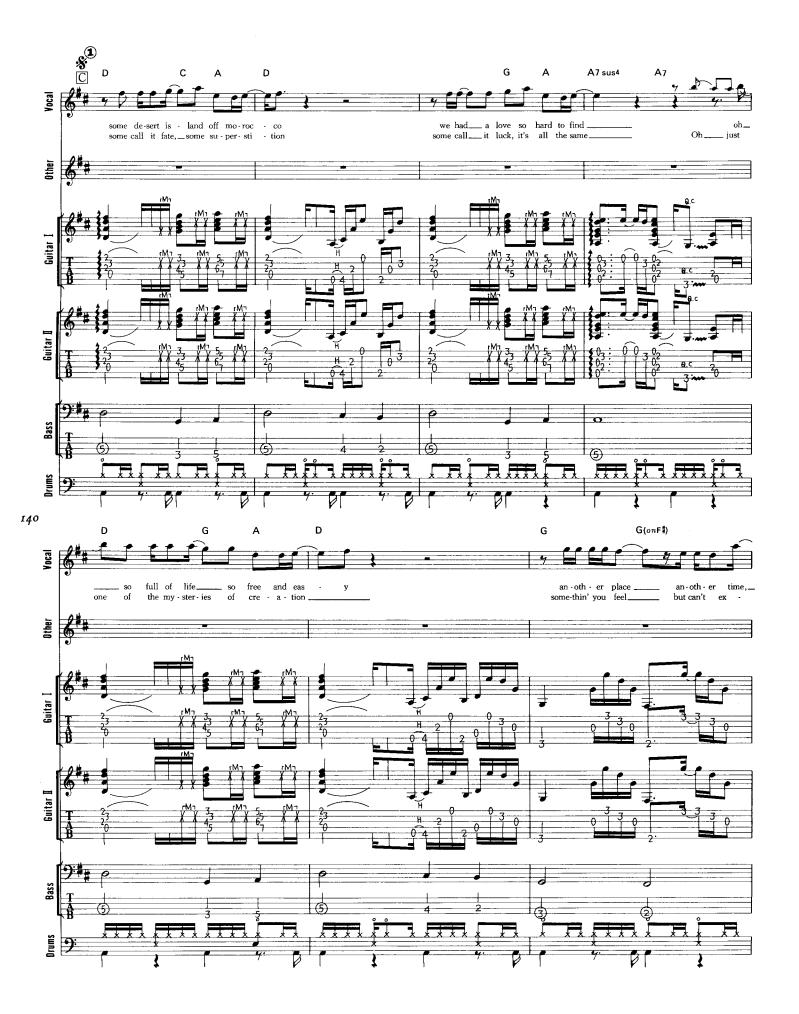








Α7





















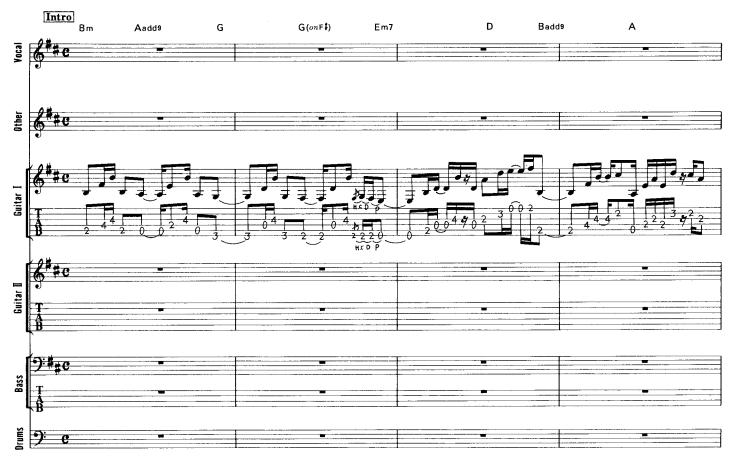
FEELIN'

フィーリン

Words & Music by Alex Van Halen, Edward Van Halen, Michael Anthony and Sammy Hagar

イントロからのアルペジオは、リズムがシンコペーションになっている事に注目。ここではギターのみの演奏なので小節感を見失いやすい。足で4分のカウントを取りながらプレイしよう。かなり難易度は高いプレイだ。時間をかけ、各拍のアタマを見失わないような感覚を身に付けよう。サウンド面では、ギターのボリュームを2~4まで落とし、薄くディストーションがかかっている感じになればO.K.だ。巨からのリフでは、余分な弦をミュートする事がポイント。Bmでは人差指の先で6弦を、Aadd9では中指を6弦に軽く触れミュートを行う。各コードの1、2弦は人差指の腹でミュートし、歯切れ良いピッキングを行う。なお、2小節目のX印部分は、右手の腹を弦にこすりつけるノイズだろう。(詳しくは前述の「Amsterdam」参照)「自からは、テンポが倍になりスピーデ

ィーでパワフルなリフになる。オルタネイト中心のピッキングだが、ハンマリングなどの時は各拍のアタマがダウンになるよう調節する事。 巨からのリードは、1弦を上手く生かしたエディお得意のフレーズ。左手のフォームはクラシカル・フォームにすると、各指が垂直近くに押さえられる。 巨15小節目のフレーズは、薬指で2弦8fをチョーキングした後、右手指で10fへタッピングし、そのままプリングを行うと同時に薬指を離し、人差指で7fを押さえた状態にする。その後は同じような動作を繰り返す。 底8小節目のプレイは、下のコード・フォームを作っておき、人差指の付け根を浮かせたり押さえたりしながら、ピッキングも低音弦高音弦という風に極端に弾き分けるというものだ。ここでは、たまたま高音弦部分で1、2弦だけが当たったという感じだろう。















































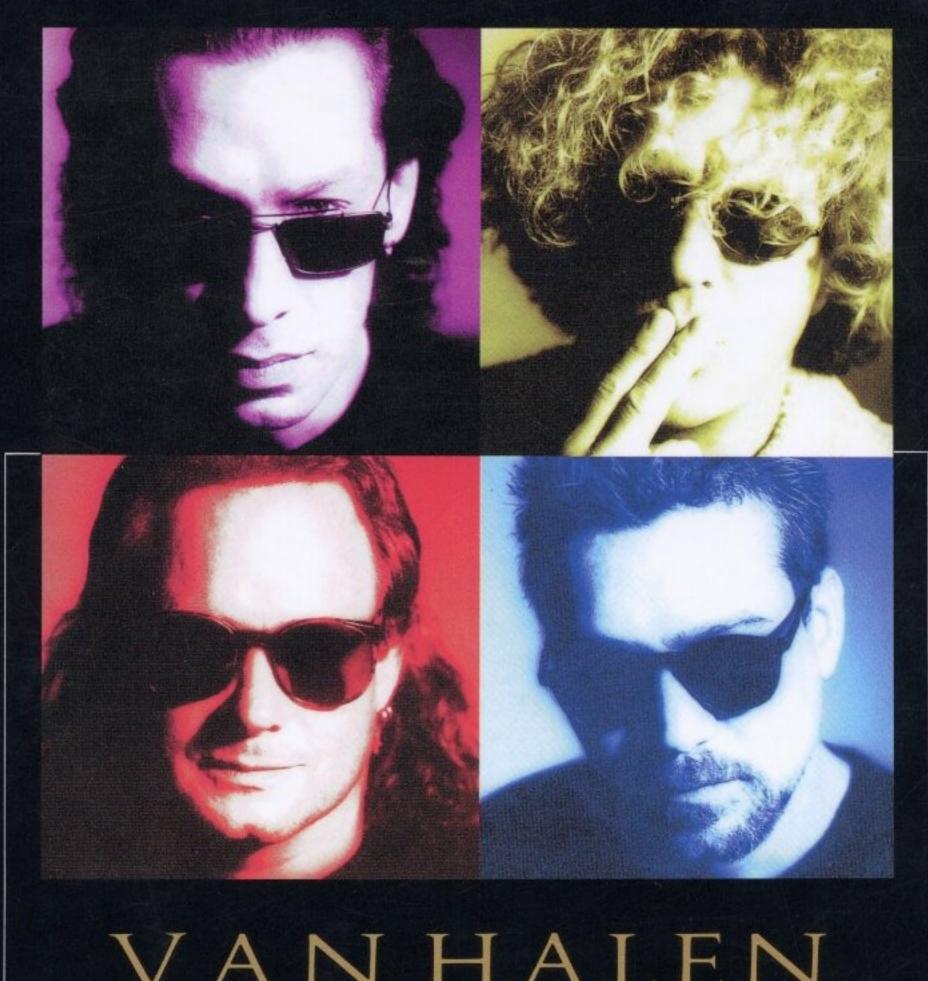












VANHALEN

BALANCE

THE SEVENTH SEAL CAN'T STOP LOVIN' YOU DON'T TELL ME (WHAT LOVE CAN DO) AMSTERDAM **BIG FAT MONEY** STRUNG OUT NOT ENOUGH **AFTERSHOCK** DOIN' TIME BALUCHITHERIUM TAKE ME BACK (DEJA VU) FEELIN'

